〔第１事件〕２００６年（ワ）第６４８４号謝罪及び損害賠償請求事件
原告　王　子雄　外３９名　　被告　日 本 国
〔第２事件〕２００８年（ワ）第１８３８２号謝罪及び損害賠償請求事件
原告　呉及義　外２１名　　被告　日 本 国
〔第３事件〕２００８年（ワ）第３５１８３号謝罪及び損害賠償請求事件
原告　劉国珍　外４４名　　被告　日 本 国
〔第４事件〕２００９年（ワ）第３５２６２号謝罪及び損害賠償請求事件
原告　夏振東　外８０名　　被告　日 本 国

意　見　陳　述　書

2010年4月12日

東京地方裁判所民事第13部　御中

中華民国台北市大安区卧龙街426巷15-1
重慶爆撃被害者対日要求賠償訴訟原告　楊　昌華

1　私は重慶爆撃被害者の楊昌華と申します。1927年11月29日生まれで現在82歳です。1949年から現在まで中華民国台北市に住んでいます。

今から約７０年前、日本軍国主義は、中国侵略戦争中、重慶に対して繰り返し国際法違反の無差別爆撃を行いました。そして、武器を持たない重慶市民を多数虐殺しました。私は、重慶大爆撃の被害者の一人として、このような日本軍が犯した残虐な戦争犯罪を告発し、日本政府に対して謝罪と賠償を要求します。

2　まず重慶大爆撃によって受けた我が楊家の被害の概要について話します。

我が家の場合、1939年6月と1940年8月と1941年6月の３回にわたって重慶爆撃による被害を受けました。母王氏と姉楊玉芳と母方の伯父王雲武の３人

が1940年の爆撃で殺され、次いで父方の伯父楊永富とその妻楊伍氏の２人を1941年の爆撃で殺されました。

私自身も1940年の爆撃で右足に重傷を負いました。その傷跡は今も残っています。そのほかに我が家の財産だった自営の店舗も貸店舗も爆撃で失いました。

3　重慶爆撃が始まる前の私の家族についてお話します。

我が楊家の本籍はもともと中国湖南省北部の石門鎮というところでしたが、明朝末期に重慶市に移り住むようになりました。その後、私の代まで約１０代に渡って楊家の人々は重慶に住み続けました。

私の父は1886年1月29日生まれで、母は1890年11月18日生まれでした。二人は1920年ころ結婚しました。父は重慶市老衣服街に店舗をかまえて骨董品の売買をし、その収入で家族を養っていました。

両親の間には1924年4月に長女の楊玉芳が生まれました。私は1927年11月に重慶市仓壩子で楊家の長男として生まれました。

こうして私の家族は、決して楽な暮らしではありませんでしたが、４人で重慶市老被服街で平和に暮らしていました。

ところが、1929年に一家の柱であった父が病に倒れて亡くなり、残った家族の暮らしは一変しました。

母は中国の旧い慣習である纏足をしており、父が病死するまでは専業主婦でした。しかし母は残された家族を養う為に亡き父の後を継ぎ骨董品店の経営をすることになりました。伯父の王雲武が、骨董品の仕入れなどで店の仕事を手伝ってくれました。

母は私と姉が一緒にいたのでは店の仕事が出来ないので、２人の子供のために重慶市市外の支馬路という所に家を借りて、四川省銅梁県石漁郷潼子園に住んでいた祖母に来てもらって子供たちの面倒をみてもらうようにしました。

父の死亡後はこういう暮らしで生活状態は非常に厳しく、私は学校にはいけませんでした。

4　我が楊家では1939年に最初の爆撃被害を受けました。同年6月9日、日本軍は多くの飛行機を出動させ、重慶の上空に進入し、軍事施設のない商業地域に無差別爆撃を行いました。幸い、母が経営していた骨董品店は被害に遭いませんでしたが、重慶市の臨江門順城街にあった貸店舗が爆撃被害を受け、全壊してしまいました。こうして家計を支えていた貸店舗が爆撃で無くなったため、我が家の生活はますます苦しくなりました。

5　1940年7月初め、私の母は、度重なる日本の飛行機の爆撃に私たち姉弟の安全を心配し、店を手伝ってくれていた伯父王雲武に私と姉をもっと田舎の方に疎開させるよう頼みました。こうして姉と私は伯父に連れられ重慶市南岸区大興場にあった伯父の友人の家に避難しました。

しかし、当時まだ幼かった姉と私は田舎の生活環境に慣れず、何度も何度も母に会いたいと訴え泣いて暮らすことが多かったため、1940年8月19日、伯父は仕方なく私たち姉弟二人を連れて重慶市内に向かいました。

その日、伯父と姉と私の３人が重慶の儲奇門にたどり着いたとき、日本の飛行機が儲奇門付近に飛んできて大量の爆弾と焼夷弾を投下しました。

このため周囲は、瞬時に火の海に変わり、人々の叫び声、受傷者の悲鳴、家屋が倒壊する音が混じり合う地獄のような状況になりました。

しばらく経って日本の飛行機が去った後に気付くと、伯父は爆撃で重傷を負い意識不明の状態で倒れていました。また姉を見ると、姉の左足は爆撃により半分切断されていて、出血が止まらない状態でした。私も右足に重傷を負い、血が止まらず溢れ出ていました。姉と私はまだ破壊されてなかった近くの家の屋根の下で、恐怖に震えながら救援隊が来るのを待っていました。私の右足は大量の出血により段々麻痺してきました。このまま死ぬかも知れ

ないと思ったことを覚えています。

6　しばらくたって救助隊が駆けつけました。私は救助隊により担架で临江門寛人病院に運ばれましたが、病院で簡単な治療を受けただけで重慶市唐家沱铜锣峡にあった防空洞に運ばれました。どのぐらい時間が経ったか分かりませんが、麻酔が切れて足に激痛が走り目が覚めました。

私は防空洞で３日間水一滴も口にしないまま、痛みと飢餓で意識が朦朧となるような状態で怪我と戦わなければなりませんでした。

私は九死に一生を得ましたが、数日後に意識が回復したとき、一緒に爆撃を受けた伯父と姉は亡くなった事を知りました。

この８月１９日の爆撃の恐怖は、82歳になった今も生々しく私の記憶に残っており消えることはありません。

7　私は爆撃から一週間ほど経った頃にやっと動けるようになりましたので、防空洞から出て母のいる衣服街の店に向いました。しかし、被服街は見る限り瓦礫の山で、道路は閉鎖されていました。母の店の近くに住んでいた人が偶然通りかかったので母のことを聞きましたが、「お前の母さんが爆撃で頭が真っ黒になって倒れていたのを見た。もう死んでいたよ」と教えてくれました。死体はどこにあるのかと聞きましたが、どこに運んだか分かりませんでした。営んでいた骨董品店も、爆撃によりすべて燃やされてしまいました。

こうして私は、父を亡くしてから最も頼りにしてきた母を、8月19日の爆撃で失いました。しかも、その母の遺体も見つからず、どこに埋められたかも分からないという悲惨な体験をしました。

8　こうして1940年8月の爆撃で私は孤児になり行く場所もなくなりました。最初、父方の叔母のところに行きましたが、叔母の家も生活が困難で私の面

倒を見てくれる状況ではありませんでした。私は仕方なく一食を食べただけで、叔母の家を出ました。

それ以降、私は路上生活を始めるしかありませんでした。自分で食べ物も確保しなければならない厳しい生活の毎日でした。私は約２年間重慶市の黄桷垭、化龍橋、磁器街、蔡家場などの地域を転々としながら路上生活をしました。私は路上生活中、毎日のように人に怒鳴られたり、蹴られたりしていました。いつも死んだ方がましだと思いながら生きていました。

9　1941年6月5日、父方の伯父の楊永富とその妻は、較場口付近で路上販売をして暮らしていましたが、日本軍の爆撃で防空洞に避難し、その防空洞で窒息死しました。これは有名な「６・５大隧道惨案」と呼ばれる大惨事でした。

10　1942年から日本軍の重慶への爆撃が少なくなったので、私は重慶で人に雇われて仕事をするようになりました。最初は重慶市唐家坨というところで軍服を作る工場で働きました。毎日トイレの清掃と子供の面倒見たり、重い荷物を運ぶ仕事でした。その後、曹家菴というところの印刷工場で働くようになりました。

更にその後は重慶市較場口の近くにあった家具製造工場で働きましたが、そこでも長く働くことができず、その次は重慶市蔡家場で船をこぐ仕事をしました。

11　その後1944年3月、私は国民党軍に参加しました。国民党軍では私は車の運転手をしました。最初は国民党陸軍十四軍85師車排に配属されましたが、内戦が始まってからは、1946年には軍隊と共に四川省を離れ、峡西省の石泉、漢英、西安、銅関、宣君、延安等の地域で軍務に従事しました。1948年には、西安で国民党軍の空軍１１大隊に入隊しました。

1949年に国民党が中国国内戦争に敗れたため、国民党軍と一緒に台湾に行きました。

1949年11月に台湾で除隊しました。その後、私は軍隊で学んだ車の運転技術を活かし、台北市消防大隊、師範大学、公路局等で車の運転の仕事をして生計を立てて来ました。私は、重慶では学校に行けなかったので、仕事が終わってから毎日独学で読み書きの勉強をするなど努力してきました。

また、1965年に妻と結婚し、５人の子どもにも恵まれました。

12　台湾では1987年になって戒厳令が解除され、間もなく中国大陸と台湾の関係が緩和されるようになりました。私は、1988年に家族訪問の機会を得て重慶に戻り、私より８歳上の異母兄弟の楊昌雲を必死に探しました。幸運に兄に会うことができました。

私は、この時以降、重慶に何度か行くようになりましたが、その際に重慶大爆撃の被害者たちが聯議会を設立し、日本に対し損害賠償訴訟の準備をしていることを知りました。

私は、さっそく重慶爆撃被害者聯議会と連絡を取り、その後「重慶大爆撃民間対日訴訟原告団」に入りました。こうして昨2009年10月5日に提訴された第４次重慶大爆撃民間対日訴訟の原告となりました。

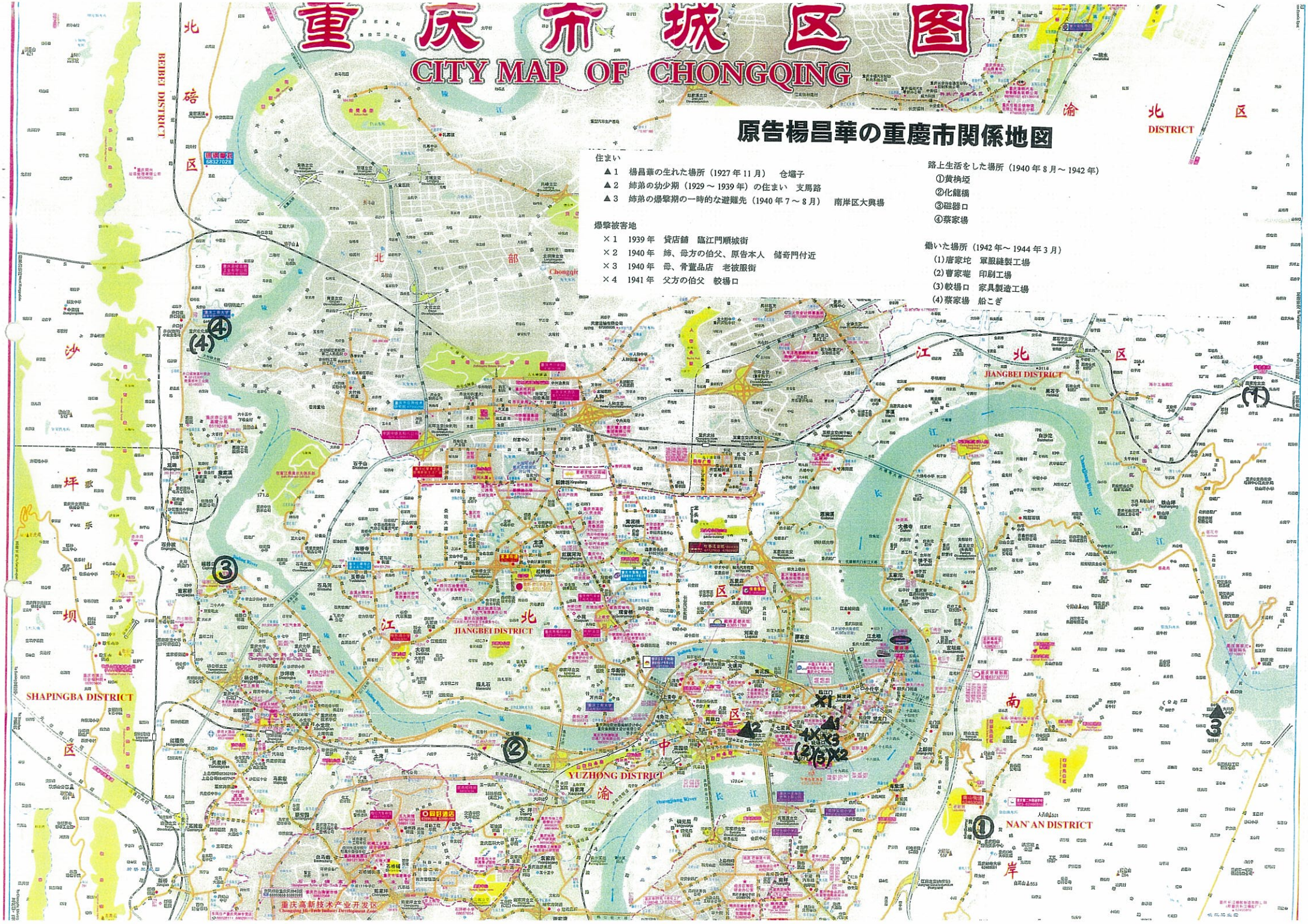
13　私は、「原告団」に入ってから、重慶大爆撃の被害者たちと爆撃体験を語り合い、爆撃被害者たちが共通した思いでいることを知りました。私は、家族を爆撃で失ったことで出来た心の空洞がずっと埋められないまま続いていたことに気が付きました。この訴訟は、私にとって、日本軍の無差別爆撃によって奪われた「人間の尊厳を取り戻す」ための大事な闘いなのです。

最後に、日本の裁判官が、重慶大爆撃の被害者に対する謝罪と賠償の請求を認めるよう強く表明して、私の意見陳述を終わります。

以上

重庆市城区图

CITY MAP OF CHONGQING



原告楊昌華の重慶市関係地図

住まい

- ▲1　楊昌華の生れた場所（1927 年 11 月）　仓壩子
- ▲2　姉弟の幼少期（1929 ～ 1939 年）の住まい　支馬路
- ▲3　姉弟の爆撃期の一時的な避難先（1940 年 7 ～ 8 月）　南岸区大興場

爆撃被害地

- ×1　1939 年　貸店舗　臨江門順城街
- ×2　1940 年　姉、母方の伯父、原告本人　储奇門付近
- ×3　1940 年　母、骨董品店　老被服街
- ×4　1941 年　父方の伯父　較場口

路上生活をした場所（1940 年 8 月～ 1942 年）

- ①黄桷垭
- ②化龍橋
- ③磁器口
- ④蔡家場

働いた場所（1942 年～ 1944 年 3 月）

- (1)唐家坨　軍服縫製工場
- (2)曽家嘴　印刷工場
- (3)較場口　家具製造工場
- (4)蔡家場　船こぎ